

# 奄美等水産資源利用開発推進事業－Ⅰ

## (沖合域資源利用開発調査：熱帯性まぐろ類有効活用調査)

榊純一郎

### 【目 的】

奄美の沖合域においては、従来から、旗流し釣り漁法によるキハダを対象とした漁業が行われている。

一方、同海域では従来からマグロ延縄漁業により、キハダより深所に分布するメバチが漁獲され、高値で取引されているが、これらは一部を除き県外船によるものであり、初期投資と高度な知識が必要な同漁業は新規参入が難しいのが現状である。

そこで、本調査では、キハダを対象として使用されている旗流し漁具を改良し、深所のメバチ資源を利用するための可能性を調査する。また、同様に深所に分布するメカジキ等についても併せて調査する。

### 【方 法】

#### 試験操業調査

##### ①対象魚種

メバチ・メカジキ等

##### ②調査船

おおすみ(63トン)

##### ③調査期間

第1次航海：平成21年10月16日～10月25日(10日間)

第2次航海：平成21年12月 8日～12月23日(16日間)

##### ④調査海域

第1次航海：奄美海域(沖永良部島周辺海域)

第2次航海：奄美海域(奄美大島・喜界島周辺海域)

##### ⑤調査漁具

立縄(テグス縄・旗流)

##### ⑥餌

付け餌：冷凍イカ・冷凍ムロアジ

撒き餌：イワシ類のブツ切り

### 【結果及び考察】

第1次航海及び第2次航海のともにメバチ及びメカジキは漁獲されず、ヒレジロマンザイウオ(通称エチオピア)計3尾のみの漁獲であった。これは両航海のともに時化が多く十分な操業ができなかったこと、枝縄の絡みが多かったこと、餌の選定が原因として考えられる。時化対策については平成22年度から調査船をより荒天に強いくろしお(260トン)に変更することで対応し、枝縄については漁業者の最新漁具はより絡みの少ない材料へ変更されていることから、漁業者の仕立てを参考に漁具を改良することで対応し、餌についても現場で実績のあるものへの変更を検討したい。

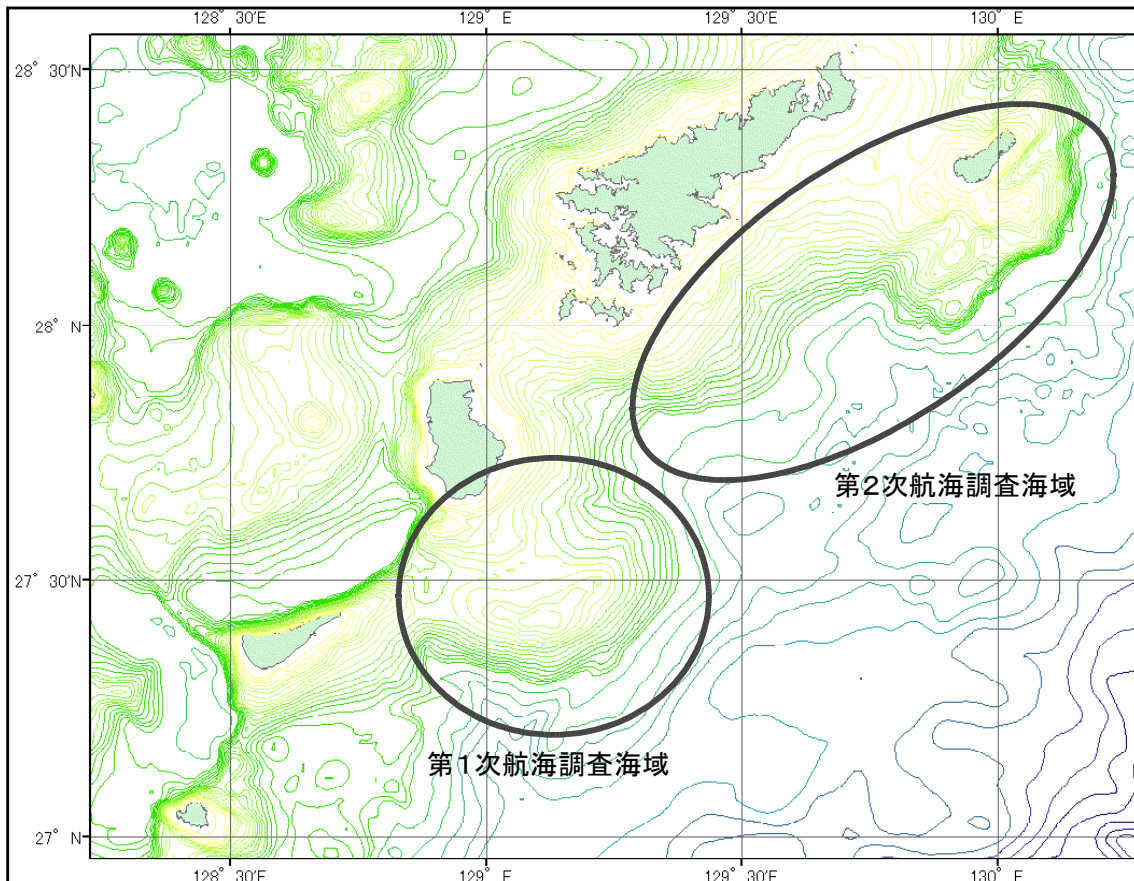


図1 操業海域図

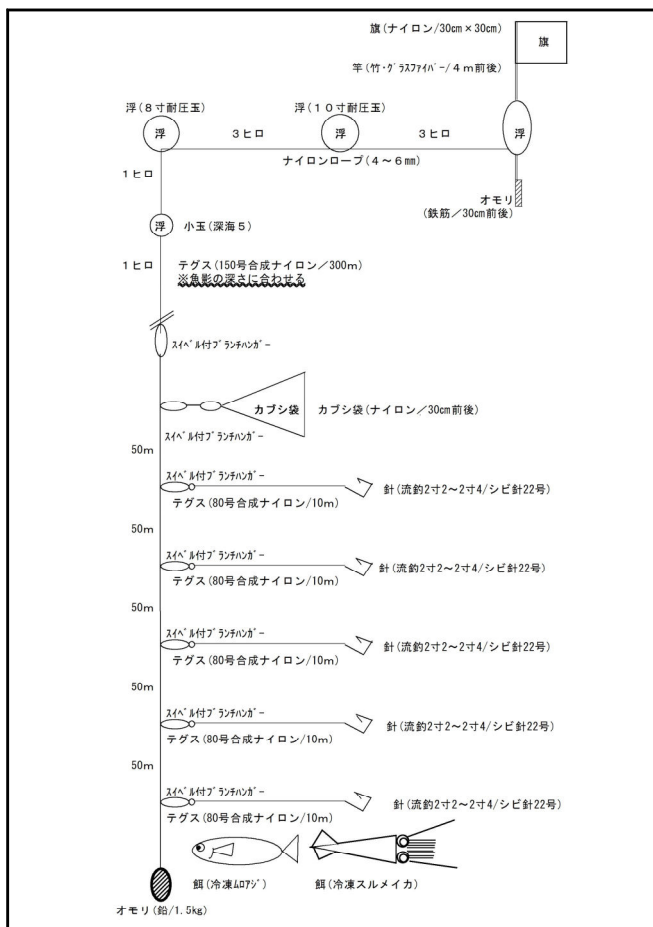


図2 漁具図